



六
花

10

2021

りっかはいくかい

いうれい温泉



山田六甲

千

秋の蟻あふぎの端に執着す
あしもとのあやふし月の出の稲美
川音の潤れきざしゐる秋簾
黒髪に銀のひとすぢ秋扇
裏窓に巻きおかれある秋簾
砥峰とのみねの芒に迷ひましたよね
離岸してたちまち荒れしおけさ柿
中指で触れなば落ちむ砂丘梨
秋めけば魚の煮付の彌彦かな

親不知子不知

栗を手に佐渡恋ふ眉の野猿かな

赤松・延川・六甲で島根湯抱（ゆがかい）温泉へ

湯抱の幽霊温泉秋の声

二尾の金魚よく太りて一尾は浮き一尾は沈みて暮らすうちに秋

うき様とお沈の方や秋金魚
麗人と蕎麦をすすれば初時雨
色変へぬ松を町家の二階より
巻柿を奈良の土産に頂きぬ

串打ちの技も味なり焼穴子

磯野青之里

くしうちのわざもあじなりやきあなご いその あおのり

物の味は調理人次第。包丁の切れ味と切る角度によって味がまったく違う。掲句の串も打ち方によって焼き上がり具合が変わる。いわば俳句の評もそうで切れ味の悪い六甲の評も食べたらずまずいと思う。磯野青之里さんの句はだんだん切れ味が出てきた。今後が楽しみ。(六)

七夕や夫の恙に泣き笑ひ

升田ヤス子

たなばたやつまのつつがになきわらい ますだやすこ

七夕の祝いをしようと思っていたら、深刻な夫の病気の疑いが出て家族で心配したが、結果疑いがはれ、喜びが家族で弾けたのである。まさに泣き笑いになったのだ。「恙」の部首にある「羊」という字は、単なるヒツジのことではなく「痒(ヨウ/かゆ・い)」という漢字を略したもの。「痒」には「腫れ物・やまい・やむ」という意味があり、ここから「羊(痒)」に「心」で「心がやむ(憂える)」という意味が生れ、「恙なし」とい言葉が生まれた。(六)

神の山 ◎ 笹村 政子

オルガンのあふるる校舎花カンナ

噴水の力抜きたる先に船

朽舟に浜屋顔の咲き出でし

とうすみの水面の風をつかみけり

笹舟に糸とんぼ来て帆を張りぬ

緋めだかの大きな影を曳きにけり

跳ね出でて床に張りつく金魚かな

七夕竹神の山より伐りだせり

遺されし美術年鑑儼匂ふ

祈りては忘るることに星祭

▽オルガンのあふるる校舎花カンナの作品、夏休みも終わり近く、誰かが学校に来てオルガンを弾いているのだろう。その空気の明るさが、喜びに満ちてグラウンドに響いている。生徒達には夏休みとカンナの花のもえるような晩夏の光景として印象深く焼き付いているのだろう。私は小学校に入学してまもなく教室のオルガンを分解して大問題になった。

▽噴水の力抜きたる先に船。噴水が真昼に勢いよく上がっていたが、時刻がくると水が止められて力が抜けたように、止んだ。噴水に遮られていた海の視界が広がり、航行する船が見えたと、ただそれだけのことだが視界が急に広がると何か理由のない喜びを感じるのである。不思議な喜びがもたらされてくるのだろう。

▽朽舟に浜屋顔の咲き出でし。朽ち船は半分以上砂に埋もれているのだろう。そこに浜屋顔が咲いている。朽ちてゆく何か佗しい光景とそこに開いた浜屋顔の瑞々しさは、何か恋愛感情を取り戻したようなときめきをもたらす。わたしはつい寺山修司の詩「浜屋顔」（家のない子のする恋はたとえは瀬戸の赤とんぼ）を思い起こす。寺山の詩をこよなく愛した遠藤若狭男は今も亡い。

▽とうすみの水面の風をつかみけり。とうすみとは糸蜻蛉のこと。小さく細い身の糸蜻蛉だからこそ風と深く関わっている。風を捉えて飛び立つのも着地するのも風任せのところが多い。その身の軽さ儚さゆえに風を上手く掴み、風に友に暮らすのであろう。「とうすみ」とは灯心のこと。

▽笹舟に糸とんぼ来て帆を張りぬ。笹舟には帆も櫓もなく不安定だが、糸蜻蛉が来てそのか細い羽根でさえ帆の役割を果たし安定して進めるのだよとの気づき。

▽緋めだかの大きな影を曳きにけり。メダカの影は小さいはずなのに大きな影を曳いているというのが句眼。

▽跳ね出でて床に張りつく金魚かな。金魚はもしかしたら水に閉じ込められているのに倦んで飛び出したのだろう。が外の世界はもっと不自由をもたらした。何だか諺めいた鑑賞になったが、世の中はそんなものである。夢風撰候補。

▽七夕竹神の山より伐りだせり。七夕にまつわる神話の世界を感じ取った。がそれを説明せず「神の山から伐りだした竹」とのみ言ったが竹には何か神が宿っているような想像をさせ、さまざまな連想をかき立てる。しかしそういう形の発想が増えてきたのも事実でベテランはもっと個性的独創的な句を求められている。そこが大変なのである。

▽遺されし美術年鑑儼匂ふ。誰か亡くなった人の遺した美術年鑑が梅雨時のカビが匂っている。直子夫妻のものか、ご主人のものか、カビの匂いが価値を上げ、とくに故人の蔵書にはカビの匂いが懐かしささえ感じさせるのである。

▽祈りては忘るることに星祭。哀しい出来事は祈りながら忘れてゆこうと、いな忘れられるだろうという哀しい祈り。

豆ご飯 ◎ 志方 章子

鬱陶し緑雨といひてみたととも

ワクチンのちくつと夜の豆ご飯

短夜を覚めて死にゆく人思ふ

薔薇色の人生なんてばらを剪る

何ほどの事なき八十路牡丹咲く

淋しくてならぬ一日新樹晴

アスパラを茹でてみどりの鬼のやう

薪能夕べの風を心地よく

夏場所や鬺肩力士の一人のみ

柏餅夫に供へて淋しかり

▽鬱陶し緑雨といひてみたととも。章子は主観を前面にもってくる作風でこれも一つの個性か。緑雨と言っから、清々しく気持ちもはれるかと思つたが、湿気の方が勝つて、少しもすつきりしない。しいていえば緑という言葉の影響か、というのである。

▽ワクチン注射が痛そうで怖かつたが、打つてみれば結構痛くはなかつた。その心地軽さで今夜は豆ごはんにしよつたというのである。夢風撰候補

▽短夜を覚めて死にゆく人思ふ。というのは寝苦しい短夜に目覚めて、死んでゆく人の気持ちをふと思ひ遣つてみる。寝苦しいが生きていてよかつた。

▽薔薇色の人生なんて、と思ひながら薔薇を買う。エディット・ピアフはフランスで最も愛されている歌手の一人。彼女の音楽は傷心的な声を伴つた痛切なバラードで、その悲劇的な生涯を反映していたのが特徴の薔薇色の人生はよく知られている。薔薇色の人生を昔は味わつたが今は悲劇的な人生だよ、と章子は吐露しているのだ。薔薇を買つて生けることができるのが薔薇色の人生なのに。

▽何ほどの事なき八十路牡丹咲く。は想像していた八十歳がこんなにかんたんにこようとは。そう思ひながら昔は八十を越えると、亡くなつても赤飯をご近所に配つた。お目出度い感慨。

▽淋しくてならぬ一日新樹晴の作品。新樹の佳く晴れた気持ちよい天気なのに出かける主人は居ないのだ、と嘆く。俳句でどんどん哀しさを吐き出せば寂しさもなくなる、と六甲は言う。章子も少しずつ気持ちが癒えつつある。もう少し。▽アスパラを茹でてみどりの鬼のやう。の作品。北海道に住んだことがある章子もアスパラには一入思い入れがあるのだろう。茹でた緑のアスパラは鬼の角のようにも思えて懐かしさもあるのだろう。

▽薪能夕べの風を心地よく。薪能は夏場の夜間、能楽堂、もしくは野外に臨時に設置された能舞台の周囲にかがり火を焚いて、その中で特に選ばれた演目を演じる能楽。昼間うだるような暑さも夕方には少し風もでて心地よく感じたのである。

▽夏場所や鬺肩力士の一人のみ。の作品。この句の鑑賞はむつかしい。勝ち残つたひいき力士が少なくなったのか、ひいきとする力士そのものが相撲界に少なくなったのか。「一人のみ」というから、おそらく鬺肩力士で勝ち残つたのが一人になつたと言ふのだろう。角力自体は好きなのである。

▽柏餅夫に供へて淋しかり。の作品、端午の節句に夫に供えてみたら急に寂しさが湧いてきた。

結び灯台 ◎ 升田ヤス子

沼波のめくれる茅花流しかな

茅花野の果ての大池ちぢれ波

通し鴨三角波に遊びけり

大池の水鏡して梅雨しづか

葦叢に声のみ近し行々子

行々子此処と思へばかしこかな

産土神に七夕の笹伐りもらふ

七夕や夫の恙に泣き笑ひ

火を入れて結び灯台乞巧奠

乞巧奠刺繍の杵も飾りけり

▽沼波のめくれる茅花流しかな。は茅花（茅・茅の穂）の出るころに吹く南風で、掲句は沼に吹くやや強い風の表現を「波により水面がめくれる」と表現したのがさすが。

▽茅花野の果ての大池ちぢれ波、の作品は大きな池に吹く風によって押し寄せられた波が縮まる処を詠んだ。茅花咲く野の果てにある池に寄せる波の様子を写生して「ちぢれ波」と名詞化して句に動感と緊張感をもたらしたのである。

▽通し鴨三角波に遊びけり。の作品は三角波が句眼。三角波とは、進行方向の異なる波がぶつかったときに出来る、峯の尖った荒い波をいうが、通常海に起こる現象で、掲句は大きな池や湖にも起こる。その三角波をも平気で北へ帰らないう鴨が遊んでいるよ、というのが。遊ぶというのは様々な意味があるが、知能を有する動物（ヒトを含む）が、生活的・生存上の実利の有無を問わず、心を満足させることを主たる目的として行うものである。基本的には、生命活動を維持するのに直接必要な食事・睡眠等や、自ら望んで行われぬ労働は含まない。本来、智慧のないものは遊べない。というのが一般的であるが仏教では苦しむことも楽しみの一つとも言われ、鴨たちは波立つ苦難においても遊んでいるとヤス子は観たのである。

▽大池の水鏡して梅雨しづか。の作品大池の様子が穏やかであるというそれは水鏡、つまり波立たず雨も降っていない様子から、そういったのである。

▽葦叢に声のみ近し行々子の作品。行々子（ぎょうぎょうし）とはヨシキリの鳴き声から来ている。葦の叢の中で盛んに鳴いている声をきいているとすぐ近くに居るように思えるが、近づくと鳴き止んで姿は見えにくい。鳴いているところへ近づいても鳴き止まないが草むらの中なのである。何だか哲学的な仰々しさなのである。

▽行々子此処と思へばかしこかな。この句のような様子を昔は源義経と武蔵坊弁慶の五条の大橋での戦いの様子の童謡があった。子供心に楽しい活劇場面で人気があった。

▽産土神に七夕の笹伐りもらふ。産土神（うぶすながみ）とは自分が生まれた土地を守る神様で、その神域に生える竹を七夕用に頂くのである。歴史的な尾上神社の神域であろうか。

▽七夕や夫の恙に泣き笑ひ。夫が病氣してその検査に一喜一憂して大騒ぎであったのだ。泣き笑いをこのように使うのかと感心。夢風撰。

▽火を入れて結び灯台乞巧奠は、結び灯台に灯を入れるのがノスタルジック。

夕端居 ◎ 藤生不二男

山百合のにはほへる杉の木立かな
たつぷりと水をたたへて余り苗
花栗のゆたかに垂れてにほひけり
藁屋根を昇りきつたる夏の月
滴りの生れては落つる音のあり
ほうたるの闇を出でゆく軽さかな
みんなんの止めば近づく遠嶺かな
竹籠の籤のにはほへる蛭かな
雨止みて小ぶりなれども雲の峰
正面を見据ゑてをりぬ夕端居

▽近年は晩夏から盆に咲く外国種の百合が、掲句のようなヤマユリの匂いをかぐことはない。大型で白く、山中でもよく目立ち、強い芳香を放ち、根は食用にも漢方薬にもなる。花は真白ではないが、薰り高く気品がある。杉木立の中に見つけたときにはこころときめく。古来歌や詩に出てくる百合はこの百合が多い。山中を一人で歩いていて出会ったときときめきが伝わってくる。

▽たつぷりと水をたたへて余り苗。余り苗とは植えた苗が余っても田んぼの隅に生かしておく。「月の出や印南野に苗余るらし 耕衣」に刺激を受けて詠んだものか。「たたへて」は、「讚えて」とも、「湛えて」とも。

▽花栗は独特のむっとした臭いがする。花が豊かということも栗の実も沢山生ることを保障されていると同じである。

▽月の季節は秋であるが、掲句のような夏の月もときには大きく美しく見える最近である。古民家の藁屋根を撫でるように上る月をしばらく見ていたのだろう。月の上る時刻にはその角度によって地平から離れ藁屋根を離れるまでにそんなに時間はかからない。その動きも懐かしい光景だったのだろう。昭和の高度成長期にはふるいものにあまり価値を見いだせなかった日本人も今は古い家や物に再び価値を見出すようになってきたのだ。夏の河原などでの焚火もしかり。

▽滴りは、夏の季語。苔や磐に水が膨らんでやがて落ちる。その音にも清々しさと涼しさを歌人俳人は読みとつたのである。

▽蛭の句。蛭の光がすーっと生まれて闇から出て「ゆく」と表現したのが眼目だが、出て「きた」とも表現できる。

▽滴りの句。「真味只是淡。神奇卓異非至人。至人只是常」というのが「菜根譚」にある。醜肥辛甘は真味に非ず。真味は只これ淡なり（平凡を貫いてこそ、非凡になる）と。濃い酒や脂のよくのつた肉、辛すぎるもの、甘すぎるものは、本物の美味しさではない。本物の味は淡白なものである。同様に、人なみはずれた天才は道を修める人間ではなく、道を修める人間は平凡な人間である。つまり、無事は貴人ということ。言い換えれば、活人は無欲に徹した道を淡々と歩みなさいということ。不二男はそれを淡々と実践する人。そこがよい。

▽みんなんの句、鳴き止むまでみんなん蝉の帳（とぼり）によって遠くの嶺が隠されていたような感覚を提示された。音によって視覚を妨げられているかに詠んだのは独創的で詩的。

▽蛭籠は竹籤（ひご）で編みである。私の持っている蛭籠は三木市吉川町で編まれたもので既に十年以上は部屋に吊るして楽しんでる。ただし蛭は一度も入れたことがない。掲句の籠は作りたての新しい物でまだ籤が匂っている。

▽夕端居の句は見据ゑる先の物が具体的にあるわけではないが、なんとなく心地よいゆとりの時間である。視点は定まらないのがよいのかもしれない。夢風撰候補。

梶の葉 ◎ 善野 行

刀自若く逝きし七夕竹遺し

星の夜に母のない子となりにけり

子らはみな母ちやんが好き星祭

梶の葉にその名を書いて捨てにけり

星の恋悪い女と言はれけり

肘ついて飲む七夕の夜なりけり

うたかたに生きて悔いなし星の恋

含羞の佳人の使ふ団扇かな

化粧せぬ佳人のバーのハイボール

半袖の女医反骨の僧の齋

▽「刀自」「とじ」は戸主(とぬし)の意で、「刀自」は当て字。亡くなった年輩の女性を敬愛の気持ちで呼ぶ称のこと。掲句は七夕の竹を遺してかざるまもなく亡くなったのであろう。それを悼んでの追悼句。

▽前句に同じで母を若くして亡くした子どもへの哀悼でもある。母はきつと心残りであったであらう。

▽星祭りの句も前句につうじて「母ちゃん」と家の中でも母を呼ぶ愛称が哀しくつふる。

▽梶の葉の句も連動しているかと思うが、母が亡くなったことは別のこともかもしれない。七夕の願い事は昔、梶の葉に書いた。楮(こうぞ)を故郷内子町では「カジ」とも言っていたので、もしかしたら生の葉でなく楮を漉いた紙のことを言ったのかも知れないと想像する。どう考えても梶の葉に墨で書いたのでは弾いてうまく書けない。と思ったが、書けば書けるらしい。梶の葉は神に通じているらしいから、来年は書いてみようと思う。七夕よ早く来い。いやいやそういうことじゃなく、掲句は想い人の名前を書いて見たものの、誰にも知られないよう握りつぶして捨てた。捨てたとあきらめたとはちがうのだが、誰かに見とがめられるのが怖いのかも。夢風撰候補。

▽悪い女の句。誰に悪い女と言われたのか、誰が言ったのかは想像するしかないが、あるいはその女性の立場になって詠んだとも思える。「君は僕を惑わせて、悪い女だ」と罵ったのか、力弱く責めたのか分からない。男心を奪うから悪い女なのだ。高橋治の小説、なかにし礼の歌詞で、女性が「いつでも死んでみせますわ」と恐ろしいことを言わせたのは男である。

▽肘の付き所によって主人公の姿勢が分かりその時の精神状態まで見えてくる。今月の句は七夕の夜どこに肘をついて何をしているかが見えてくる。おそらく酒を呑んでいるのだ。しかも肘がつけるのだからかなりリラックスしている状態で女性の魔法で力が抜けたとも見える。窓の空を見上げながらなら、二階の欄干から星を見上げながらであらう。その夜上手く晴れて星が沢山見えているのなら七夕に相応しいし、欄干の内側に女人でも侍っているなら、まことに相応しい夜になる。ましてや何処かの旅籠(はたご)

たご)ならばミルキーウェイを渡る彗星の心なのである。泥舟でなければいいのだが。

▽うたかたの作品。うたかた(泡沫)とはなにも残らない泡のような一生である。人生百年は長いように思えても宇宙時間からみればほんの一瞬泡がうまれて消える程度の人生なのだ。それでも悔いはないという決意はすごい。「あなたと恋ができて」悔いはありません。というのである。それは幸運なのだ。

▽齋というのは未齋のことですその血を引いていること。

花手水 ◎ 住田千代子

オクターブ届かぬ指やアマリリス

芍薬の残る二輪を花手水

算数の面積求む麦の秋

凶鑑繰る手にお宝の蛇の殻

甘酒^{遣禮}を啜り鬼ごつこの続き

羊蹄を咲かせ大池静かなり

風を呼ぶ膝のあたりの蚊帳吊草

葭切の声の華やぐ水辺かな

飯盒に淹れる珈琲行々子

魚捕へ鵜とびたつ夏空へ

▽アマリリスの曲をピアノで弾いているのだろうが、幼くて指が一オクターブに届かないのである。お孫さんか児童館の子供かを詠んだ。

▽芍薬が庭に沢山咲いて、部屋に生けたが二輪余ってしまった。それを手水鉢に投げ入れておくのである。神社や寺院ではお参りする前に手や口を清める『手水舎』を、花々で飾ることを自宅で楽しんだ。

▽麦の秋には気温もなんとなくむしむしとして頭の働かない頃。算数で生徒に面積を求めたが皆頭を抱えて計算が進まない。千代子先生はさてどのような助け船をだすのだろうか。

▽字童保育の鳥か植物図鑑を調べさせて居るとき、一人の子どもはお宝の「蛇の（殻）衣」を指に巻いて片時も手放さないのだ。子どもの気持ちわかる。

▽甘酒は夏バテを防ぐのに飲んだ。だから夏の季語。冷やした甘酒を飲んではまだ鬼ごつこの続きをするのである。▽羊蹄はギンギシのこと。それが大池の水辺に咲いている静かな光景。調理法によっては美味しい。

▽蚊帳吊草は八月頃、黄褐色の地味な花穂をつける様が線香花火に似る。茎を裂いて広げた様は蚊帳を吊った形に似ていることからその名がついた（植物図鑑）と。文字で書いてもこれから後どれほど理解できる人があるだろうかとおもふほど、懐かしい植物になった。カヤツリグサの高さ（膝の）あたりに風が吹いている様を風を呼ぶ、という表現が詩的であるが佗びも少し感じさせる。

▽葭切は別名行々子（ぎょうぎょうし）で葦の青々と伸びる時期にその縦枝に止まって名の通りうるさく鳴く鳥オオヨシキリは日本には夏に飛来する「夏鳥」で、湿地や川原のヨシ原で見ることが出来る。掲句は加古川市の大池とよばれる文字通り大きな湖のような池の水辺でけたたましく鳴いている様子を詠んだもの。大池で時折吟行句会をしているがその時の作品。

▽飯盒と珈琲の作品。大池吟行の折、善野行さんが飯盒を持参して湯を沸かし、珈琲を皆に振舞って呉れた。それへのお礼の挨拶。俳句には細かい挨拶も必要である。

▽鵜（ミサゴ）は鳶よりお大きく鷲と間違えそうになる。掲句も大池での作。ミサゴは昔吞吐ダムに鷲が来ているというので二三人で見に行ったが、どうやらミサゴのようであった。大池でも鮒か鯉を鷲掴みにして飛び去ったのである。魚は結構大きかった。